

私が医師を志した根っこはどこにあるだろう、と考えたときに、目に浮かぶのは、母方の祖父の顔です。私は昭和51年に母の実家の長崎県佐世保市で生まれましたが、私の記憶の中にある祖父は、温厚でおっとりとした口調で話し、陽だまりの中で大好きな花を愛で、白衣で大きな黒い往診カバンを持って歩いている姿です。

その祖父は、実は、激動の人生を生きた人でした。戦前は東京築地で海軍軍医学校の教員として働き、真珠湾攻撃では空母飛龍の軍医長として戦争まっただに身に置きましました。空母沈没後も生き残って日本に戻り、家族には知らされずに再度戦地へ赴いていたようです。そして終戦時には軍医としてアンダマン諸島におりました。灼熱の熱帯の激戦地で、壮絶な体験もしたでしょう。終戦後に捕虜となり、本来ならば生きて日本に戻ることができない、責任ある立場だった祖父ですが、当時現地で流行していたマラリアに対して日本兵にも現地住民にも分け隔てなくキノコネを処方していたことから、住民の方々から「この先生は生きて日本に返してほしい」と嘆願していたでいて、日本への帰還がかなったようです。

終戦の頃、日本に残された家族は海軍病院のある広島県呉市におりました。原爆投下時、小学生になったばかりの伯父におぶわれた幼い伯母は伯父の背中越しの遠い空にキノコ雲が上がったのが見えたと言っていました。終戦後、

祖母は家族を連れて帰郷し、その二年後にようやく祖父が生きて家族の元に戻りました。

その後には生まれたのが私の母親でした。祖父は母を大変可愛がり、戦争の悲惨さを語ることはなく、かわりに常に「人の役にたつ人生を送りなさい。公のため、お国のために働きなさい」と話し聞かせていたとのことでした。

私自身もこの言葉を母から聞かされて育ちました。その中で、医療というものが人々をつなぐものである、また医療の前には人々は分け隔てがないのだ、素晴らしい尊いものなのだと感じておりました。祖父は私が小学校にあがる前に亡くなりましたが、筑波大学国際関係学類を卒業したのちに私が医学を志したのは祖父の影響だと思えます。

その祖父は亡くなる前に佐世保市の旧海軍墓地に飛龍の碑を建てました。毎年6月の沈没した日とお盆には慰霊祭を行い、それが伯父に引き継がれています。今年も沈没した日に来られた飛龍の搭乗員はついに一人であったと聞きました。時代が急速に流れ、日本は経済成長を遂げ、私たちは医療のみならず様々な

物質的な恩恵を受けられる時代になりましたが、これらの話は、たった70年前の話です。

国民皆保険が今の形として導入されたのは昭和36年で、それより以前は、現在は当たり前のように治療できる病気で多くの方が生命を落とし無念の涙を流していました。それもたった55年前のことです。

私は、祖父と戦争の話や、静かに慰霊を続けている伯父、そして、国民皆保険導入時の苦労や努力などを当時の開業医の先生方やご家族に伺うたびに、「大切なものは目に見えないもの」という言葉を身に染みて感じます。人生の折返し地点をおそらく超えたであろう私たちの世代が、先人から何を受け継ぎ、何を次の世代につなげられるだろうかと自問しつつ、いただいた立場を大切に、小さな一歩を積み重ねて、信託に応えられるよう精進していきたいと思う日々です。



参議院議員

自見はなこ (じみ・はなこ)

- 1976年 長崎県生まれ
- 1998年 筑波大学第三学群国際関係学類 卒業
- 2004年 東海大学医学部医学科 卒業
東海大学医学部付属病院 初期研修
- 2006年 池上総合病院 内科後期研修
- 2007年 東京大学医学部小児科入局・同附属病院小児科勤務
- 2008年 東京都青梅市立総合病院小児科
- 2009年 虎の門病院小児科
- 2010年 国会議員秘書（～2013年7月）
- 2013年 NPO 法人日本子育てアドバイザー協会理事
- 2015年 自民党参議院比例区（全国区）支部長
日本医師会男女共同参画委員会委員、日本医師連盟参与
日本小児科医連盟参与、東海大学医学部医学科客員准教授
参議院議員比例区当選
- 2016年